135
4
539

№010740

駿々亭
突飛道人

出放題序

余不幸にして近頃赤貧棒神に喰ひ付られ身の越方や行末を思ひ廻せばまわる程最とゞ哀れを十寸鏡かゞみに照る我面を詠め頗る盆鎗然たり而るに九尺二間の裏店の戸をあぢ明くるものあり見れば目覺屋の親玉なり曰く先生滑稽寓意其稿かきやと丸に藪のら棒の尋ねゐせつ道人曰く余ハ昨今時事に有感故に嘘八百日を以て新聞記者の怒露筆を洗ひ假令一枚の羽衣かしと雖も仙人とかつて不日商山の宿麓なる儲け鯛窟に入らんと欲る故に陳糞漢粉わる口の艸稿の如き一片半折だにあれなし君もし余を疑はゞ乞ふ君に醜喘嘱と五同樣家宅搜査と云へる滅法界なる無上の權利を擧げて與ぬべし乍併只今新橋のお馴染より一通の召喚狀を寄せらる依て之を彌

陀の頭上に捧くゝ之れ傳家の系圖よりも大切なり敢て或い破損せる勿れ間もなく主人塵芥會社の社員氣取りで道人ゲ不動産の一部なる紙屑籠の中より一篇の管皿ぬものを擔ぎ出し曰く先生何んぞ横着の大隊長なる哉と無暗ゐ屁狸靴をならべ遂ゐ編輯の勞をとらしむ噫迂回の因果應報又猫的と待合茶屋の階上ゐ痴々栗合戰の軍資ゐ供せるゐ足ると社主の眼玉を偷み稿を脱せるに當りて則ち出放題の序をものし之を附與せと鹿云

時于明治二十一年六月ノ上院

道樂大學校長笑贊位袴一等猴爵　口野過山

叢々亭突飛道人事

口上

一傍訓は口上道人の學弟草井探穴をして擔任せしめたる者なれば間違なしとも保証しがたし故ゐ默して展讀せるあらば毎度諸君アリー……然りと雖も讀んで疳癪玉ゐ障るあらば寧ろ讀まざるゐ鹿猿あり散士敢て疳癪持の爲ゐ編纂せ猿あり

一此書腐儒者抔の見るべきものゐ荒猿あゝ夫れ田舍ゐ百も江戸の車夫も一ゑび卷を開けば猫は布團を温ためて以て招喚狀を發し狐は行末を契らんゐとを請ひ其べゑつかれる秘傳者載せて卷中ゐあり

一此卷を讀み或は無用の書とおゝ者あらん斯の如きは編者の寓意を知らず所謂箆棒國の大統領とも謂つべきあり

一此書傍訓を眼目とおて讀むあらば上野ゐ鐵道ゐ乘つて九十九里ゐ濱を徘徊せるか或は新橋のレールを柴箸とせる如き間違ひはあらざるあり

出放題目錄

○月給院總公に上つるの封事
○總的お代とり要石君お與るの書
○滅法の解釋
○福の神に與ふるの書
○大小の紙幣等同瞭金貨の洋行を悲しみ送るの序
○社會の膏血虫に驚く
○鳴物遂に社會に停止せるおとなし
○鍍金珍談
○莽吟文
○赤貧棒局長群債鬼を祭るの文
○娼妓の病院へ梅毒檢査お之くを送るの序
○吉原青樓の記
○怪猫魔狐國境及び共有糧食を爭ひ両裙
○大に魔葛ヶ原に合戰せ　付時に徑軍局外中立の令を發し仲裁に入る
○奔突化六の傳
○楮幣先生の傳
○鶯のおばけ
○不良軒出連出狂傳

出放題

上二月給院總公に之封事

陋里の賤妓屈固吉ら尊嚴を冒し書を月給院總公鼻下長閣下お白せ伏せて社會の景況を見れば苦勞奔走國民たるの本務を尽せと喝ふも結局祥燈娛同樣口計りにて皆己れの勝手を謀るのみ苟くも其不勝手已れお有らば社會万民は爲め雖も決せて爲せべからぜ敢て之を爲せも其妾之を目せて愚と呼び狂と叫ぶも之を辨護せる途おかるべし否な方今轉々の時世を知らざるものあり發日府痴兒令を發せて曰く打鵜擊鴉以て其巢窟を屠れと蓋し「殺盡情界の鴉を殺し總公と朝寐をして見鯛」と云へる吾蠅は常に娛前お於て搔き鳴らせ三線は糸は汚塵付に調和せるの歌意お出でしならん果せて然らば粹の公爵通の勳一等と評せるも妾知る敢て過言に非らざるを既に我れ〳〵社會に對し此忠命あと妾等敢て願ふ更に府下各大小新聞を呼き毀し編輯奴を石川島お若しくは市谷等へ放逐せるの特令を發し以て其身を檢束し其舌を抜き探訪野郎の手帳を沒收し而せて杉山流は太針を以て其口を縫い れんおを夫れ新聞屋なるものは常お我蠅花柳の臭穴を探り苟くも臭氣あれば一發の放屁一席の坐轉寐と雖も必ず喚て之を紙上お揭せ且は公等を侮辱おせて曰く髯的曰く泥鰌と又余等は秘妾姦たる我蠅を目せて曰く怪猫曰く魔狐と口に任せて罵詈嘲笑し殆んど人類社會外視せる既お斯の如し良し之を忍ぶも一夜二枕の怪夢を結び四足一體はおかのたる功能書を公然之を新聞に揭出して以て之を鬻賣せ豈夫れ溷らんや紅粉社會八百餘員みお切齒扼腕彼の新聞屋編輯野郎の肉を食いんと欲せ是を獨り我蠅妾らはみおらぜ公等の頭痛八卷亦裁し此に基づく

なからん其妨碍患害豈日撲滅の令出でし鵜鴉の比に非らざるなり………抑も月給院の花柳社會に於ける猶一體たるが如し苟も吾蠅妾等の便あらざる所は公等も又便ならず由レ之觀レ之新聞屋編輯野郎は共に青天を戴く屁唐猿の讐敵にして我蠅妾等の爲めに一臂力を振ひ尽力管猿は固より至當の義務なり然るに茲に最も怪むべきものは公等彼等を見る鬼神の如く之を遇する親戚も十舎を避く一の開業式あればバ則ち聘し一の燕禮あればバ則ち招に以て其歓氣を取り増長制して屁唐猿に至らしむ何ぞ鵜鴉に強勇にして新聞屋編輯野郎に卑怯なる夫の新聞社探訪野郎足を檣木にし眼を大平洋の如くし鉛筆を尖らし奔走するも其探り得るものは僅に十中の二三のみ事もし内に破れ我蠅妾等口を開いて既往の事を撥するあらバ月給院裡人多しと雖も恐らくは一人の瑕なきものなかるべし公等宜しく利害得失の輕重を比較し一錢の爲に百錢を失はず願はくは新聞屋編輯野郎のお口饒を制せん爲め口税則ち今一層の痴房税を賦課せられんことを焉妾等鈍首炎排狂行奇夢幻

代二鯰的一與二要石君一書

災排白す泥鯰之を聞く一從要石屬鹿神鯰頭萬古遂無地震鯰腐性嘗て此詞を信じ沐浴三拜常に以て保護を仰ぐ然り而して両三年以降國家多難貧神襲ひ來つて全國に寇し神錢一走避けて海外に高飛す是を以て用度支へず地震頻々として以て踵を接す火脈の及ぶ所鼠尾の觸る〳〵所恐く其難の罹らざる所なし以是鯰輩の如き戰々兢々として[illegible]業を失し賞牌龍紋付の別品に別れ遂に[illegible]る故に日々苟安を所願するの外知[illegible]曰く一日の責を塞ぐのみ椅子となすのみ曰く備の駄人足豈赤心を以て職を掌どり事務を勉強するに遑あらんや夫を諸羈的の心頭概するに皆斯の如し社會論者の肘を張り人民の怨望憤慨又ヒヤ〳〵喝采宜からざるや蓋し此不吉不祥を致す所以のものは抑も誰の罪ぞや鯰按ずるに要石君閣下の怠惰なる乎苟くも俗歌の如く萬古不動能く鯰頭を壓し鯰輩をして地震に罹るなからしめバ何の憤慨か之れあらん邪魔に憤慨あるのみならず昌平安樂官海平穏の吉祭又陸續として妓樓船宿待合茶屋等に顯はるや蓋し鏡を懸けて間抜面を看るが如し今試に其二三を擧ぐれバ青樓に滑稽以て千秋を皷舞し待合茶屋に都々逸以て萬歳を頌讃する如き是なり而して其恩波の流るゝ所遂に天猫魔狐女髪結手出入の呉服屋小間物屋等に及び伺は且無情の梅櫻之れが爲に一層の香を添へ天心の月も爲に光赫を増し天下則ち治るべき也要石君閣下よ閣下にして苟も命令を大神に奉じ居ながら何ぞ之を顧みずして怠惰するの甚だしき若し鯰輩の語を納れず尚或は怠るときは則ち閣下の讐敵なる石工群鶴等に命じ斫つて橋梁修繕の材石となさん永く土足に蹂き馬糞を戴くの恥辱を與へ以て其名譽を害せんと欲す請ふ閣下熟思百省前後利害のある所を顧み答ふるあらんことを切に希望に堪ざるなり頓首々々

滅法解

夜鷹、鳥を執らず船饅頭、餅を沽らず陰陽博士は其身の上を知らず論語讀みの論語知らず鯰社會の其身風前の孤燈たるを知らず生物識川に入り當世の木葉學者僅に四書五經を讀むことを得れバ則ち既に聖人君子の樂屋に入りしと思ひ寛永通寶を以て賤となし畜生を呼で俗物と譏る是皆素寒貧野郎の焼餅勘一等とても云ふべきなり夫れ古人は智あるを以て貴し

と爲せ今人い金滿家を以て貴しと爲せ故ゑ大博士ゐ去て索寒貧と一笑を送らるゝより筆ろ富貴ゑ去て野暮と呼べきん乎論語を讀み了つて手の舞足の踏む事を知らざる中頑愚者とならんと欲せる者い是所謂勸工場の賣品併も正札付れ狂生なり嗚呼時ある哉孔子も大失れ下坐ゑ居らを齟齬い經業師れ名ゐ殘る王子寂寞と去て新田繁盛あり鳥居衰へて春信盛あり是を造物主殿ご榮落苦素敵な大仕掛を爲したるものあり嗚呼心得たゞ〳〵年長去て學ゑ入らんと欲せるもれい朱熹の章句より學たゑとを恥ゞ頗る地獄の一足飛びを好む頻讀れ直浮べ是則ち當世の行き過なり上野れ山ゐ登らんと欲せば必ず山下よりせ京都へ行くゑい必ず品川よりと是を豊著翁を喰つて鰻の美味を知るを得んや今人牛の糞を味噌とおせ・・・川ち是を能いざる所ゐり人の身を以て人れ道を行ふい尙金を以て驕を極むるゴ加さる事ゐ之を知らん乎獨ゞ壁を睨んで來る堂々たる理論板垣退助糞を喰へ後藤象次郎何んの其ゞ理靴を並べて喃漢それゞ春風靜然と去て梅花の香薫を送り一朶れ明日邪雲を排し遙か聞もる其聲い鍋燒溫飩ェ一象一煮〳〵

與二福神一書

眠犬町自由吉等誰んで書を大黑天俵下ゐ致せ餘さゐ曰く稼ぐゑ追付く貧棹ゐしと實ゑ大喝一聲ヒヤ〳〵れ極黠と岩猿を得を我蠅夙ゐ此語を遵奉し朝い髮を蒙つて而して出で晩は星を戴いて而して蛙年又年月又月未だ嘗て一日も懈怠せる事なし然ゝ家ゑ餘るなく赤貧隊の聯隊長常ゐ洗ふゞの如く殆んど人間坊三田の老婦ゞ云ひし如く虫毘ゞ〳〵

病大ゑ流行し人類いヤも更ゐり猫や狐ゐ其又但得ゑ七色蕃椒ゑ燒芋ゐ店賃ゐ皆喘々と岩猿はなし終ゐ重症のゞ〳〵ゐ益々多きを加へ殆んど底止せる所を知らず豈病院嬶婦れ御德な天は即ち大穴無智れ命れ別名ゐして嘗て酢空名貧今名れ命と藥草を試み病苦を救助遂ゐ日本藪醫者の鼻祖とおりしと然らば則ち俵下は福德を降せ診察粹とは其ゐ職掌の其宗家たる世人れ公許せる所ゐり今や紊迷怪化藥方い西洋中澤港國と譽れも高き何んと獨遜れ藥劑大ゑ流行し且つ福は赤髯大明神の爲めゑ專有劍と云ふ最恐ろしきものを占有せられ暗ゐ俵下の疳癪玉ゑ障るい諒察せと雖ゐ現ゐ同邦人間の貧病喘塞ゐ陷入るを見て知らぬ顏の半兵衛さんで乙う濟し込んで居るゑ聞へ猿なり冀くは我ご大黑天俵下君ご秘藏眠劍を振ひ喘塞及び疲弊病の元素ある病魔大鯰的の頭腦を叩き壞さんゑとを我這獅頭ゑ堪へざるなり

紙幣等送金貨大人飛航于歐洲序

維を時雙龍元年金無月某の日惠毘壽講ゐ於て赤楮幣青楮幣縱片羅橫片羅等大小翩々翻と去て大紙庫ゑ會去て金貨大人の際限もなく赤髯奴れ爲ゐ擒ゑせられ歐州ゑ航そるを送る大人一たび日本を去をゞ再たび復た歸らず英ゐ拘留せられ佛ゑ禁錮せらを或い獨ゑ奴とおり米ゐ僕とある又或い賣奴とおり遠く澳ゐ飛び其最も薄命おるものい則ち猛火ゐ投せらを其渾躰を浴解せられ更ゑ姓名を變じて洋貨と變じ變じ變器と化し更ゑ幾多の辛苦を嘗む紙幣等之を思へゞ則ち豊其分袂を惜まざるべけんや夫を金貨い則ち紙幣の本尊樣ゐして吾國紙幣い則ち金貨の影坊主おり然るゑ今大人等皆ゐ遠く海外ゑ飛去り紙幣の輩獨り國內ゑ翩翻を恰も

是れ本尊なくして而して其宗教を擴張と一般烏ゞ人々の信仰を保つを得んや屁を放つて而して臭かちさをバ豆鉄砲ゐ如かざるおし夫れ屁なるものは其聲音を重ずるものゝ非ず臭氣あるを以て尊とおゝ故ゐ虚影あつて而して其實躰なくんば絲瓜ゝ皮ゝ如おゝ影い虚を尊ぶゝあらゞ實ゝ從ふを以て其信直を得るもゝあり故ゐ紙幣等大人の後ゝ從て而して相離る屁唐猿誠ゐ斯くの如し然るゝ大人紙幣等流離困頓忽ち其名望聲價を失ふをも顧みゝ遠く身を赤髯奴の手裡ゐ寄せんとゝ噫大人の薄情も亦甚だゝからゝや吾蠅紙幣等ゝ悲嘆尚能く恐ぶ屁志ゝ雖も獨ゝ如何せん國内聲を振るの赤貧乏ゝなるを焉貧格ゝ困苦い亦姑く堪ゆべしと雖も日本ゝ獨立權を保つ能い猿るを大人の洋行い國家の存亡興廢ゐ關そる一大事あれば豈夫れ之を焦思苦心せ猿屁縣や大人或い曰いん我僥倖ゝ之て赤髯奴輩の擒ゝ就き其眷族を擧げて尽く奴隷の身とおゝと誰も幸ゐ之て紙幣等の存そるあらば則ち亦以て通用權を辨ゝべし況や紙幣の産殖い巨資を費さず之て容易ゐ得可きい何引手茶屋より無賴烏捉て狐鹿アリ……ゝ聲も何ゐも掛られゝ京町邊のスモール……松金、松山、稻辨、新萬、若しくい安尾張、中米、河内屋等へ獨ゝ繰込むと又之れ同じ狸靴おらゝや凡そ貨幣なるものい則ち素寶買ゝ媒介たるゝ過ぎゝ苟くも能く其通用を得ば則ち紙片固より可也矣木の葉又固より可也矣往古ゝ蠻民い貝殼を以て通貨ゝ換たるの一例を以てとるも又其物質を擇ぶを要せざるを証明そるゝ足る況んや大政府圍子大印數箇を鈐して以て其貨價ゝ證そるゐ於て何ゝ其物質を擇ぶを要せんやと噫之れ何の胡言ゝ哉皮相の屁理靴を以て視之信ゝ大人の言の如く紙幣等其鑛物ゝ王子村ゝ富み其製造い印刷局ゝ功妙おるを以て破棄ゝ幾千万圓を一瞬間ゐ摺出せべし振り如何せん其價値い其增殖ゐ從ふて日一日ゝ亦落そるを焉一昨年來より國費ゝ多端ゝ際し本尊樣の有無を問ふゝ遑おらゝゝ之て而して巨額の影坊主を增發し又惠比壽公を儲ふて而して頻ゐ銀行の片羅を釣ゝ上げ我ゞの眷族の繁榮い祝賀そべしと雖も而其價額愈低れて大人ゐ及ばざるい凡そ幾等ゝ平尚ゐ眷族を增加そと雖も國内は徒らゝ紙屑問屋と一般の慘狀ゝならん以て牧羊場ゐ充るの外い復た爲そべからざるゝ至らんのみ是れ紙幣等ゞ敢て大人ゝ別を惜む所以あり大人の洋行は彼ゝ僥倖生ゞの風ゝ吹廻はしゝ由て歐州見物ゝゝ〳〵出掛るの比ゐあらず彼は即ち往て還らゝゝも敢て差支はなけれども此い則ち去つて復々來らざをバ人大ゐ困却ゝ資ゐ困却そるのみならゝ金庫空乏國保つべからゝ噫大人既去らバ則ち紙幣等我ゞの身の振方を如何せん物價騰貴それゞ則獨り其罪を紙幣ゝ歸し洋銀騰貴それバ其尻を紙幣ゝ向け物産の衰微貿易の損失亦みゐ其責を紙幣ゐ擔き込み紙幣幾億萬の眷族ありゝ雖も何ゞ能く嚮々たる世人の呵責を防ゞんや大人世人の小言を燒くも亦決之て理由おきゝ非らざる也今夫れ本尊樣を失ふて而之て徒らゝ影坊子を剩し以て其用を辨せよと云ふゝ雖も恰も青樓ゝ活妓を欠て徒だ其寫眞を貢るゞの如く誰の其寫眞を抱へて其枕價を拂ふものおらんや大人去るの後い紙幣等ゝ零落凡そ如何ゞ哉片羅々々然ゝ之て口說嗚露々々焉ゝ之て嚮位せざらんゝ欲そゝ雖も得ん乎噫恨し哉大人何ゞ其紙幣之零落を顧みゝ國家の衰頽を思いゝ飛び去る夜叉心ある乎大人の洋行い素ゝ赤髯奴の誘拐ゝ我國人の活智なきゝゐ係ると雖も飄然拂衣して父母ゝ國を去る者い蓋し情ゐ於て忍びざる所おり紙幣等ゝ悲嘆い髯公別嬪ゝの比翼を割くゞの如きあり紙幣等ゝ遺憾い薄夫の爲ゐ捨らるゝの山神ゐ似る

り回顧せば今を距る十二年前曾て大人と交換を期せる此誓詞い空しく水泡よ歸せんとせるか唯大人身い擒りとなり去ると雖も心ゐ復た歸るを誅るべし余らも又朋々力を尽さて以て國産を振起し何れの時か輸出の額輸入よ倍せるの勢を得て再び大人を呼歸せ此勞働い息らざるべし今別れゐ臨て敢て大人よ望び所あり大人復た去るものい日よ疎き此薄情ゐる勿れ且大人今回の洋行い赤毛之揚帶ゐ係り誠ゐ止むを得ざるゐ出づると雖も今よ復た濫ゐ歐州見物此遊的等ゐ從ふて貧棒神の上塗りを爲せ事勿れ紙幣等設ひ間接よ價を減ずるも一回は尚よく一國の通用よ充て以てよく國内貿買の媒介を辨せべしと雖も大人の事は則ち我之を如何とも為る事能ざせ大人能く其身を謹み決して不經濟家の爲めよ濫出らるゝ勿れ吾蠅紙幣の身は固と輕ふ去て飛び易く大人此躰は元と重く去て動き難し苟も其身を謹むゐらば則ち又何ぞ恥辱を赤毛奴の手ゐ受けんや既往よ臍を嚙むとも亦及ぶべからざ請ふ幸い大人の洋行を送る……

膏血虫の説

膏虫あるものは何ぞや生物の膏血を吸ひ盡くし其性命をして枯死せしむる淺田宗伯も匕を投げ松本總監も閉口と一種特別併も賞牌龍紋付の不治症あり其病原何れの地よ生じ來るを詳らかよせざと雖も蓋し怪化の風之を撓し蒸暑此雨之を濕ほ

るのみ古人此所謂螟螣蟊賊の禍いも未だ嘗て斯の如き……

頻せど其類ゐるや甚だ多し頭深長……

……あり其形ゐるや……

……起の内ゐ容れ金鎖胸部ゐ晃……

々たり玉環指間ゐ粲々ゐり居宅い必ず洋館を携ひ壁よい四方洋漆を塗り而して洋琺を敷き洋書を積んで而も洋々自得純粹此洋人と雖も嘗て斯此如きの洋風いあらざるゐ……

朝齷夕齷〳〵齷齪務則ち胡摩摺りの職事よ鞅掌る者は是れ中央清婦以下婦犬痴獺より群蝿蛾蝶等よ至る悉く皆人民の膏血虫あり腰ゐ小蟆口を挾み足よ高駒屐を着け或い蝙蝠傘を携へ或い洋杖を提げ大面高鼻歩るれば天地の狹隘ゐ困しみ居ゐて先達此不明を嘆じ屢々磁石主義とゐりて吉原妓軍を攻擊し其他牛肉店よ楊弓窟ゐ射的場ゐ出攻し而ゐて最も高等の遊蕩浮薄の諸學科を卒業したるものい是れ父兄の膏血虫なり祖師の法服い服るゐ足らず祖師の法言ふよ足らざる也梵鐘を撞く頗々身情を念じ九愚々々木魚を敲くを布施此多少を撿閲し優婆夷飛切りデコ〳〵此比丘尼ゐ毎夜ゐ聯掌柄と云へ淫導をゐし時々衛生則ち肉体上の五藏法を演じ自ら眞如教導職よ任じ人よ向つて惰牟々々を唱ふる者い是れ則ち信向者此膏血虫あり……其身ゐ毛絨絹帛を纏ひ山字此帽子を戴き八の字髯を捻り居然たる官員ゐ去て官あらず……口を開けば則ち理財を論じ國益を議し舉足則ち柳街ゐ走り花巷ゐ入り片羅を時き散らし施々と去て猫狐よ已れの舅下長如何を測量せしむるものい是れ則ち諸會社株主の膏血虫あり……堂々たる爵位を握り濱ぶし貨幣を播き散らし自ら般樂怠敖を鳴らし調子も頓痴戯〳〵歳月を過了ものは是れ則ち馬鹿族野郎ごの世襲財産此膏血あり……

一笑百美を呈し千嬋艶然として歌吹の海中よ浮つて巧ぜよ艶的を釣り沈鴨樓上よ妙ゐ痴客を擒りゐし面皮の鐵い以て鐵道ゐ代ふべく尻氣の輕き以て風船を作るべき者い是を遊治漢の膏血虫あり……目時計の針を搖かし頤を以て暗號を通じ春閨を切制し綾羅は白肌よ襯

し甘芋は即ち丹鼎よ飽き浸潤屬受遂ゐ腥血を絞竭るものは是即ち痴旦的の膏血虫あり……噫……天下何ぞ蠢々膏血虫の多きや亦何ぞ其被害の甚だしきや今日よして宜しく早く撲滅せんべ人民の膏血終ゐ竭尽されん矣我蛔故ゐ其異を記して以て春秋特書警戒の義ゐ附そ哺漢……

鳴物不停

大凡物其平を得ざれば則ち鳴る敢て毛唐人韓昌黎の言を俟たず我日本の能く鳴又何ぞ彼國ゐ讓らんや大古の事い不日古物共進會の開會までとまて置て源平以來其克く鳴るものを擧れば清盛い即ち暴戾を以て鳴く叛賊を以て鳴くものは北條足利勤王を以て鳴るものは新田楠氏……信長は翠ゐ鳴り秀吉は智よ鳴る武田上杉の如きは共よ武を以て鳴る鳴るの久しき人心既ゐ厭く此時よ當り家康い德望を以て鳴り雲驤龍變遂よ克く三百年の大平を闢て而まて六十余州復た鳴る者ゐし然るよ其末裔ゐ及んで各藩及び愛國志士を志て鳴らざるを得ざるゐ至らしむ蔬し又天ゐるかゐ積年人權を束縛し人民を見る土芥の如く己を自ら公方と呼び將軍と唱へたる因果應報も又恐るべきゐり……下つて嘉永六年外船の始めて來るや攘夷尊王の說大ゐ天下ゐ鳴り萬延元年櫻田ゐ鳴り文久二年坂下よ鳴る矣關東ゐ在つては新徵組大和よ在つては天忠組鳴る水戸鳴る長門鳴る次で九州の芋又鳴元治元年以降全國の人心四分五裂ゐて而まて鳴り鳴聲絶て維新と鳴ひ皆謂ふ邦内復た鳴る者ゐしと然るゐ豈料らんや奇モ福岡鳴り甲縣鳴つて乙縣鳴る彼の鳥……

より鳴聲國ゐ絶ゐ或い血税ゐ鳴り或い改租よ鳴る或い還……ゐ鳴り征韓論鳴つて天柱折け台灣の役起つて海外よ鳴り江藤鳴り前原鳴り彼の野を傷け「あたゐい、てゐい、だんなは、いけゐい、いさいは、あとより、」此電信を發せしめたる彼神風連の如きは最も鳴るの頑々たる者ゐと西海の僻隅よ伏龍ゐり鳴らんと欲ゐて而まて未ざ鳴らず四周星を經て明治十年よ至り獨憤蹶起して大ゐ鳴り九州將さよ皆鳴つて全國を呑まんと欲そ其驥尾よ付して鳴るもは福岡、大分、山口其勢ひを見て而して鳴らんと欲そる者は四國の經節ゐりとそ龍志達せ八闋月の後終ゐ殲れて城山一片の草露とゐる於是乎世人皆云ふ維新の功業初めて鳴り國家豈又鳴る者ゐらんやと是より鳴りもの一變して柳巷花街は絃歌大ゐ鳴り青樓鳴り割烹店鳴る遊船宿待合則ち土手の瓢亭神田は怪化湯島の魚十邊りは事よ依ると白晝と雖も笙笛の鐶鳴て而して醜聲鳴り汚名鳴り愛國者の珍ゐ不平を鳴らそゐり或は發狂して突然清水谷ゐ鳴るゐり其鳴意外よ出で人をして吃驚仰天せしむ斯の如きは鳴るは尤も惡質よ志て如何なる理學博士も化學々士も分析解剖頗る究理ゐ苦むゐらん社會は不幸最も大なり矣既よ鳴る者は刑よ就き鳴らんと欲そるものい辨舌條例の爲めよ閉塞せらる而らば天下復更よ鳴る者ゐらさや否勳章鳴り年金鳴恩賜金鳴り妾贈鳴と志士鳴り大砲鳴る何ぞ又鳴る者ゐしと云ふ屁縣や鳴るを制する者よして其鳴る猶此の如し後日安んぞ又鳴ゐ鳴ら猿を得んや噫夫れ鳴聲も又濱の砂の二幅對哉本統ゐ習ゐら濟ないよ……

鍍金珍談

佯學生或る求利先生ゐ問ふて曰く生之を聞く住古泰西ゐ究理學者ゐりガルバニ氏と云ふ善

く電氣の妙力あるを知る而して遂に其力を藉りて以て器物に鍍金をするの方法を發明せり凡そ實體を爲す者物として鍍をべからざるなし眞に不可思議の妙術あり敢て問ふ果して信あるか先生則ち得意然揚々乎として而して膝を叩ひて曰く好ひ哉問や予最も善く之を語り鍍方は奇妙なる金石土木皆能く鍍をべきあり君見ずや唐物店は前窓必ず玻璃鏡と美人の額とを掲ぐ而して其四緣い則晃々耀々として金光人を射る金箔佛象の剝脫易きの比あらざるも是即ち木體に鍍をあの妙力あして又楪子と瓶子とを見よ花紋燦爛として錦色飛射して恰も描金に髣髴なる則ち土石に鍍をるの妙力なり金屬い最も鍍し易く銅や鐵や皆能く金と化をべき也銀器の如き一たび之に鍍をれば純金に異ならず故に好商奴輩い銀時計に鍍して而して之を金時計に擬して以て田漢野夫を欺く者往々あれあり之を名けて天麩羅と云ふ蓋し醜さを掩ふて人を欺くの謂也或は空商貧面を粧ふて財主を釣んと欲をるも又此天麩羅時計を襟に表て以て人を驚かをそ其金鍍れ如き固より又天麩羅なり君復好商に欺かるゝなかれと生曰く鍍金の妙は則ち妙なりと雖も固と人を欺くれ法なれば學者れ惡む所あり生輩亦鍍金擬擬の學者なりと雖も敢て詐僞を好まず先生亦迂般の不潔物を違ざくべし然らざれば則ち恐らくは世人博學先生れ面を見て亦無學の鍍金となさん噫……先生決して露れ易きの詐行ある事勿れ是生ご敗て忠告をる所あり先生笑ふて曰く予汝を以て我門の顏回と爲をや久矣今に表て我か謬見あるを知る汝れ愚へ可しあらざるあり全く鍍金せざるの眞愚あり汝耳を穿ち予の言を

則ち世間の金も玉の如く珠玉も碎れ如し吉原の今紫新橋の桃太郎（皆方今の名妓）と雖も若し其面に垢して洗ふなく其髮に塵して而して梳ずるなく身に襤褸を纏ひ脚に敝履を穿ち曾て粧飾を施さゞれば東京廣しと雖も遊客多しと雖も又孕まし難しる者なし獨身野郎の無妻局長と雖も亦顧みる猿べし矣故に物飾をかけを則ち其價を減じ飾ありて而して其價を加ふ近來百器に鍍金をるい亦婦人の紅粉を粧るごの如し將に其奇價を釣んと欲をるあり況や人に如てくをべし〳〵余曾て之を洋書に徵を上古羅馬に大僞君子あり頭に金冠を戴き身に錦衣を着け指に金環を約し胸に金靈に懸け骨朶と襟飾と亦皆黃金なり坐をるに椅子あり行に馬車あり亦皆黃金を鍍ばむ蓋し金は則總て純金にあらず即ち是れ鍍金なり此人や驕甚だ長ふ表て而して髮甚だ短く眼に防塵鏡を懸け手に消倦杖を携ゆ遙に望めば其面世界の群書を暗知をるもれ〻如く其口古今れ明論を吐露をる者に似たり漸く近けは則ち固と威光あければ又德色なし是れ之を人間の天麩羅と云ふ即ち其身を鍍金をる者あり生曰く鍍金の妙力を借て而して能く美食を釣り美衣を獲るの僥倖を得るあらば則又妙なり生又速に鍍をべきなり請ふ先生其方を授けよ先生特を捻て曰く汝先つ其髮を長ふし其髮を刈り而して汝ご買入あなしある銀時計を受け出し其時計に鍍し汝ご銅煙管を鍍し衣類の如きは則ち柳原に走つて歩兵れ着古しの袴袴短服を買ひ黑帽と洋傘とは宜しく之を屑屋に謀り買來るへしと生又曰く言語應對は則ち如何せん矣汝須らく新柳二橋の間に奔走表て之を聞先生に學ばゞ可なり諧謔學輕薄術は最も善く研究をべき也讀書は則ち先つ新聞紙を閲表て而して其說を偷

み次ぎ醜譯書を讀んで以て其力を借り或は拿破崙の假聲を吐き或は孔夫子の僞舌を動し口頭則ち和漢洋を併呑するの態を粧ふ可きあり其の臨機應變の術を巧みゝ去て能く人の耳目を撫し能く人の意ゝ副ひ決して貴人の心ゝ逆ふある勿れ是れ即ち利口を馬鹿ゝ鍍するの方法秘傳あり汝之を能くせば必ず僥倖を得べき也生果して之を能くするあらば則ち鍍金の身を抱て而して之を用れの處ゝ鬻んや曰先づ電信局ゝ嗅托去て之を人相見先生ゝ報して而して其價を問ふへき也然ると雖も若し權衡を持するの人ゝ遇はゞ則ち速ゝ避くべきなり汝ごの性固と輕薄なれば則ち才量亦薄し矣若し地金の價を論せば則ち復た三文の價もあきものあれは汝誤つて鍍金の皮を剝くゐる勿を生日く先生幸ゝ之を憂る勿を生ごの身と交換するものは即ち又純金ゝあらぎ必ず純幣あり紙を以て紙僞の輕薄此人を買ふゝ於て何んぞ權衡を用ん先生則呆然覺ゐぎ識らず嘆聲を發するものは是即ち窓下の鼾息ゝして而して例の如く一床此夢談あり看官決して此說を信ぎる勿れ

林吟文

業寂僧都書を擲つて而して喟然として嘆じて曰く嗚呼寂い哉……秋此風は颯々蕭々と去て腹は鳴りて臍は答ゝ頰は荒ぎて骨出づ天下ゐ知音なし誰あつてか我を尋ねん芭蕉響て雨此來る事を知り栽葉搖て鹿の過るを覺も忽ち社ゝ入つて來るものあり曰く汝人を指し鹿とそる平怖るゝ事勿ぎ我い是れ粹ゝ去て而して妖物ゝあらず陳糞姦の嫡流ゝ去て所謂銅脈先生とは是れ我あり夫れ昔の京は奈良の京今の在鄕は京勝り天ゝ夜這星あり地ゝ總猫合腹の大明神あり勅任四等三百圓の月給は杓前ゝ飛び十二袋錢は筒の中ゝ空し此中衆生日夜ゝ共樂まて老將さゝ至らんとそるを知らず僧都獨り何爲れぞ四國猿の饑饉年ゝ遇へるごの如く也幸ひ籠狩りの序ゐ誤つて此山中ゝ入る能く我ゐ從つて而して歸んや否僧都問ふ今維れ何れの代ぞ乃ち角太夫知る事を知らぎ園八の正傳をや緒論得て而して聞くべけんや曰く可あり夫れ三都の好事日一日より新たゝ內證の逼迫又年一年より急あり神武は邀たりれ染久松より以往存して而して論せぎ劇場南北倡樓い東西五步高を曳ひて地震をあし三味線を叩て太鼓とあそ珍々焉たり雖々乎たり南風の總魚炎天此水者頭を轉ぎれば既ゐ陳迹となる我を今知る所は特ゐ昨夜の噂のみ逝く者い斯の如きか晝夜を舍てぎ道德亡びて而して仁義とあり仁義變じて粹となる粹極つて而して水を呑む今世ゐ當て天地を震動し鬼神ゐ非常ゐ感覺否鼻藥を與ふるものは惟夫れ金錢平僧都頭を振つて曰く夫れ里は新地と名くをば律僧必ぎ入らぎ店を生洲と云へば精進車を回へぎ我惟た猿の尾の赤きは知ると雖も別嬪の眉の白きは知らぎ否按したる事夢ゐだゐなし粹矣粹矣夫れ周の諺ざゝ謂へる事あり善い急げと矣美食は夕宵ゝ喰へ今生苦勞去て而して極樂ゐ生れんよりは寧ろ先づ樂んで而して後ゝ地獄とあらん君請ゝ木魚を叩け我船來聲の本調子で艶歌せん歌ひ終つて之を記ぎ舌は電光の如く筆は風雨の如し婆羅〻蝶と去て卷をあぎ今夫れ三都を搜さば則ち猶僧都の如き者は一兩人あらん寡きは衆ゝ敵せす此集以て之を化さば則ち世界成とく粹ゝ去て其而地獄ごの繁昌せん疾く來れ我れと共ゝ歸らん鈇囉狸茶賴吏は何事ぞや僧都曰く叔父分去焉挑燈消し鱈跡ゝ

お出で……

維時明治廿年十月日赤貧楮局長兼素寒貧省大臣娼山位裙二等猴爵赤貧小丸ごの
困窮切迫長嘆大息ゑて左手よ缺茶碗を捧げ右手よ空米櫃を皷し飢顔は甚々皮膚は栗々實み
金路不融通商賣不景氣之大當惑日を以て恭ゑく質屋、米屋、薪屋、及び差配人等の群鬼を無
錢山困却寺よ祭る汝群鬼飢勢敵情仮令衝突そべきの舌鋒ありと雖も又振り回はそべきの拳
戟ありと雖も暫く其會計は白旗を捲き其提燈の篝火を減して謹んで予ごの遁辭を一聽せよ抑
も予ごの赤貧は穴ゑ陷て而ゑて若干の債を負ひ鉄面皮の以て汝等よ對を可きの仕儀よ至るも
は則ち畫よ朝寐を好み酒色よ溺れ博奕を嗜み且女郎を買ひ藝妓を聘そる等の致を所よ非
ちず畢竟は汝等ごの常よ高利を貪ま飽まで貪慾を逞しふゑて而ゑて曾て弁官等の苦情を顧み
ざるを以てあり予固と言を喰むと雖も汝等も又罪あり余一々其始末を告げん汝質屋曾て予
ごの敵たる温袍を十錢よ當らぎとあし將さゑ之を價外よ擯斥せんとそ予强ひて之を二十五錢
よ沈めんと欲し踵再三汝ごの店よ到て數回歎願し手を摩ま跪を訴へ首べを搔ひて苦を辨明を
と雖も汝恬然とゑて聞猿者は如く剩さへ予ごの親戚半虱子を睥睨して曰く噫汚穢ある哉絞り
と認むるもは則悪く虱卵あり此敵袍又數錢は價あし止む事あくんば則ち拳骨を貸さんは
みと(車夫社會五錢をげんゑつと云ふ)何ぞ踏み倒しは甚だしきや予殆んど汝ごの吝嗇は面皮
を叩かんと欲そと雖も昨今は鬱春ゑ腹い換へごのたきを以て憤を忍び怒を抑へ僅よ五錢を掴
つて而ゑて止む汝知らず乎余一衣を典それば則ち身よ纏ふもは一敵繻袢と半股引とはみ
天既よ寒しと雖も一家寂寞とゑて而ゑて磬を懸るごの如し器丸大鉢ゑまと雖も炭あくんば則
ち亦殺を取るゑ由あし予ごの中若ゑき事幾何ぞや汝若し怨は一字を知るあらば則ち恐品は
好惡を問はぎ一圓金を惠むと雖も亦可あり況んや二三十錢をや然るに汝僅々五錢を以て我
冬衣を捕へ且高利を貪り毫も仁心なし犲狼と謂はん平將た角鷹と呼ばん歟實よ名狀そべか
らざるは無情あり五錢は則ち忽ち溜酒二合鯨三疋ゑ盡き飄然去つて烟より輕し爾來勇を皷
し寒を衝き而して日よ人力車を挽き東奔西走千辛万苦漸く十錢を獲て以て舊衣を贖はんと
欲それば則ち汝鼻以て余よ接して曰く既ゑ限月を越へたり今や流をて柳原は邊よ彷徨を若
し之を贖はんと欲そそば去つて之を古衣屋よ問へと汝は無慈悲ある一ゑ何ぞ斯は如きや余
今憤胸は煩くごの如きを忍んで而して温言以て汝よ謝する者は則ち他なし只損料布團は亦汝
ごの庫ゑ重禁錮たるを以て若し之をも流されなば横町は夜及婆よ劒突を噴ふを恐をてあり然
らば汝は來つて典利を促さん爽い來つて損料を責め余既ゑ向背は襲擊ゑ遇ひ殆んど其呵責
ゑ堪へぎ汝若し舊悪を贖とんと欲せば宜しく余よ數日は猶預を與へよ來一月は中旬よ至ら
ば即ち必ぎ利息を償ふて而して附替をゑそべ汝固弁官等は在るよ由て而して生活を余又
汝ごの典舗は在るよ由て而して融通を夫れ之を人間社會は交際と云ふ汝よ魚心あれば即ち余
又何ぞ水心なからんや汝債鬼靈あらば少しく猛省そる所あれよ……
汝米店は債鬼よ汝も又半泥棒は商賣あり桝量は即ち必ぎ辛らく代價い即ち必ぎ現なり試よ
一升を再量それば則ち常ゑ五勺を欠く余ごの財産い二升を買ふ事能とざるは荒世帶あり既よ五
勺を減ぎれば猶大ゑ糊口安を妨害は今汝を攻擊そる材量を示さんよ汝ごの米を喰ふてより腹く
常よ楞々而ゑて未だ曾て飽ごぎ蓋し之を升目は不足あるを以てあり故よ余其怨よ執せんと
欲し貴友某は名を借りて正ゑ汝ごの債を負ふ實ゑ三升五合は價あり余指ひて其債を踏まんと

欲と汝百言を費すと雖も金一錢以て拂ふべきもなおし汝強情と逞しきふし止まぎんば此空米櫃を擔き行け余仮令道路に死そるも復た汝ごの米を喰えず汝も又人なり余ごの死そるを憐まば宜しく舊債を以て佛に回向料と為て余に施すべきあり然らば余一放屁を供へ以て汝に靈に謝せんと……汝債鬼請ふ果して靈あらば余ごの言を容れよ……

汝は薪商なり汝虎大に聲を放つて迫來ると雖も其債額僅々二三十錢に止まらぎ曾つて薪一杷に價を拂ひ而して三杷を借るは其一債あり塵積つて山と作り遂に若干錢に高に及ぶ者あり故に汝等仮へ治安裁判所に勘解を仰ごんと欲そと雖も擧げて之れごの證據物件とあるもなし且此債たるや汝ごの山神と余ごの細君とに葛藤なり……而るに汝近隣に好誼を破り余ごの門前に怒鳴るもは又不人情ならぎや汝もし聽かざきば余惟ごに葉を舐ぶれに一言あるにみ汝心を靜に為て聽一聽せよ余は貧と雖も義理を知る況や復た芽に生ぎべき時なきに非らざるをや幸ひに若し大金を拾ふ而らば即ち必ぎ速に以て辨償そべし汝聞ぎや人世は即ち七顛八起金錢は即ち輪環窮りなし汝小債を以て余ごの身を傷る勿を汝暫く額に青筋を正誤せよ口に火焔を止めて而して余ごの裏店を脱却そるに吉日を待てよ必ぎ僥倖あるべきなり汝若し此事を聽ざきば余斷然勝手にあるそべき一言にて放任そべし余又敢て言を飾らざるなり……

汝靈神に存そるあらば余に逆螺釘諭を拜聽して默止そべきもにあり……

汝差配人に汝は群債鬼に大統領なり否一大類物野郎なり指を屈そきば則ち店賃に滯はり既に三月に渉る一月一歩二朱に為て正に壹圓二朱に金額なり債も又至大ならぎや余の性極めて狡猾なりと雖も獨り店賃に督促に至ごては即ち以て鐵石肉となりがたし況んや馬耳東風視もつけんや若し佛國王族に如く逐放讃案でも提出され茶又身を容る可きに地あし余に店賃を拂はざるや頗る裏店社會に名あり之を以て又店請を托そべきものなし是汝ごの具さに知る所あり故に余は臀を天に し頭を地に し三拜九拜頓首災排敢て勘辨を請ふ余に盲葉如し蟲さゞる所あらば補欠として豆藏即ち賞牌付に阿房鱈經に坊主を併も秋葉に原か佐竹に原か若きくは島原より備ひ來ると雖も敢て鳴謝せ猿屁縣や止むなくんば即ち家傳に鼻藥を調合為て汝ごの怒胸を鎮伏せんと為鼻藥は即ち余既に之を備ふ即ち捕鯰五枚と昆布一杷とを是れ歳暮の寸賂に過ぎぎと雖も實に夫婦に両褌を典て購ふ所に者なり品は即ち粗なりと雖も志きは即ち厚し汝債鬼靈驗あらば余ごの志しに切あるを以て幸に恕そる所なれよ……

茲に貧棒局長某又更に汝等群債鬼に對し岩猿屁から猿も に汝等狐年を以て尋常の歳晩とあり東京一般大不景氣ある事恰も水あきに舟を行り兵なきに戰ひを挑むごの如し金融全く杜塞し商店總て閉あり窗だに我蠅赤貧棒社會にみあらぎ金看板を掲る連中と雖も又首に回らざるも に多し加之ならぎ昨月祝融氏の怒に觸れて萬戸一灰金融まぎ〳〵絶て復た一歩に往來あし其甚だしきは即ち三圓に廿五錢に利子を收むるもにあるに至る貧棒に腹楢木を以て屠るに若し汝等固と余ごの懷中を知つて余を故らに呵責に土獄に投ぎ何ぞ殘忍湖情に甚しきや汝等鬼に名を負ふと雖も要そるに是れ婆婆の鬼あり八大地獄に鬼は死人を責むるを聞くも未だ活人を責むるを聞かざるなり然るに汝等口に慾焔を噴き而して奪ひ去らんと欲そるの勢は三津川の奪衣婆より鋭し凡そ借方の通義たるや借る時は則ち地藏となり償ふ時は則ち閻魔となるものは常あり然るに汝等貸方の身を以て却つて閻魔と為つて而して阿

責を逞ふするは第一政府規定の貸借條例に原則より悖るものと謂つべし汝等若し再び攻め來る事あらば余は留守の二字と不仕合に三字とを以て哨兵線とを汝等又若し乍ら恐れに二字を捧げて兵を法庭に擧るあらば余は即ち財産限に三字を以て敢て立涙に返答せんとを夫を汝等群債鬼よ尚くは嚮けよ

送娼妓之病院序

明治二獸年九月廿九日鼠文散士を臀に用心より困り避けて東蠶根岸に海水浴より遊ぶ歸途狂げて花街に入る醉興氣動に乘じるのみならず股間に奴馬的頻々饑餓を出訴するを以て飲湖に酒蛙と花院より登り而して居殘と爲る後朝土曜日に適當せ娼妓等將さに病院に至らんとを因て愚弄半分之の序を作り小菊の紙に筆染めて其辭に曰く猿に尻眞赤と雖も自らを知らず反つて他に尻に赤きを笑ふ牛に臀塗尿と雖も自らを厭とず反つて他に臀の塗尿を厭ふ是れ所謂火山の鼠は其熱きを知らず糞土に虫の其臭きを知ら猿の謂ひある平實より思ふに上い國助に花魁より下い二十錢の臺所預に踏張に至るまで皆に主人の內檢査を厭はず反つて醫者の手でピンセントを進入し丁寧なるお世話に係るを厭ひ小言だら〳〵病院に至り頗る不滿に色あり就中酒蛙突あるい諸諸を玄牝の門頭に施し四邊の毛草を把つて束髮とあし或い半片を剃り或い目鼻を描き以てお醫者先生を愚弄せ其爲せ所皆過てり矣寐倒惟るに昔し〳〵の其昔し唐聖人の國を治むや德澤洽く禽獸に及ぶ後世の飛び揚るものの之を贊め鉄瓶に銘し鼻紙に書し傳へ以て自惚鑑と爲す焉今や大賢明政府新政を施し其德澤窗に禽獸に及ぶにみならず蠻々に至て諸諸の不動產物に及ぶ保護に厚き孫堤の如くお世話を燒て呉きるお世話を燒て呉きるに

大川に洗ふが如く是れ獨り諸諸に幸福のみあらず亦我蠅漂碌王の幸福あり若し夫れ政府の大きなお世話茲に及はずんば諸諸安んぞ●點の玉帳に多きを見るならん（女郎ごの茶ひく晩の多き時い玉帳へ●玉を付るあり）諸諸等苟くも鼻柱を取らん事を願いぞんば則ち他の尻を突ぐ事を而して其臀を厭ひ以て政府に慈仁滅法あり難きに懸着し轉々狐舞しお醫者に賴み檢査を受くる事を爲せと　時に鼠文に相方屁固鵜い煙管をとり煙草を捻り之を燃し一吹予に與へて曰いく「何故お前はんいッー憂心いるんざ升のッー」と是に於て暫く別袖を惜み獨り暗燈部屋に入り不景氣的面をお志是ごの序を作る既に稿を脫そば金龍山の八時の鐘い

ーン〳〵……

吉原青樓記

金龍山に北に青樓あり吉原と号ぞ前に八町の土堤を抱き遠く隅田川の流れを帶ぶ來る四手繻あり還る頭巾大盡あり彌よ驕り野暮盡もに似たり此町に遊ぶや孔子も粹とあるを願ひ釋迦も振られん事を恐れ親父い山神を振捨て息子い勘當を忘る人とぞて此街に遊ぶ猿もれい人にあらざるあり畜に人にあらざるのみならぞ又偏に山家の猿に似たり。ぴんぞ。やんも。おまはん。わちき等の妙音を聞けば則ち異見折檻の野暮を摶いぞ忽ち馴染深間の切あるを樂しび八文字に道中い人目を憚かぞ引舟禿挑燈等美を盡し善を競ひ中に町に輝く待合もる者あり口舌もの有り漫々ぞて恰も天人の集るごの如し此花街を徘徊それば更に夜更を知らぞ已に又「ちとあちら〳〵」のお言葉に從ひ閨中に入れば獨り來臨の遲きを待兼て幾たびか

心お廊下のベタン〳〵お悦ばしむ花魁徐々と來るべ伴り以て狸寐入をなそおやお前はん狸ざ升あつン狐の癖よ狸寐入もねへ盲駄這入つて起そゞの娼務だろう達ておんまり克くお眠てな升からサー……喃漢と乙お、ちん配剤の娯詫宜とい實以て安くいねへゞの是れ腐敗儒者杯の夢よざよ見る能は猿所なり嗚呼粹なるかあ〳〵……願くい西京娼妓お長崎の衣裳を着せしめ東京此張りを持せて大坂此揚屋お遊はんとは實お我蠅贅成〳〵ヒヤ〳〵喝采宜あるかあ駄郎嗚呼夫を色情の君子東京娼妓の張りよ陥らずんば誰か又傾城の貴きを知らん……伊令花柳大博士此名を得るも猶ほ居續の長きお誇る矣……

怪猫魔狐合戰裙談

失れ怪猫の魔狐お於けるや同じく怪獣よ籍して共よ妖媚を闘ざ勁もそれゞ仇視そるの勢ひあり蓋し互お猾智を逞しふして他人の糧を掠奪せんと欲そ此野心あるよ由つて近頃白狐巣を各處お營み而して專ら妖術を施し跋扈猖獗往々怪猫の國境を侵畧ま て以て其糧食を掠むる事益し少々よあら猿なり故を以て大お怪猫と源あり猫湖苦此代疑士たる糊苦怪魂妓員荐りよ狐國征討此建議案を妓員連署ま て之を妓院長お提出そ姉猫股王遂お葉痴門鈍狡此兵法を以て征討此命勅を下そ……

猫山班助紅裙隊お長たり猫田赤藏緋褌隊よ將たり猫川三毛腰奇轉隊よ將たり猫村白吉紅粉隊お將ゐり猫野尻貢遊擊隊よ將たり其他放屁黄屁各々一大隊之よ副ひ慾深猫吉總督よ本砲仁輔代參謀長たゞ其軍統べて三萬三千三百三十三疋振旅ま て先づ柳橋の本營を發し錦帶の橋を其くより勢ひあり於是可狐國大お驚き直お刺使を王子稲荷を岩稲荷及び神稲荷等禁稲荷等此各社よ派遣し以て戰勝を祈る而ま て全國の各痴夢壺お電報或い電話氣を以て急お野羅狐を驅り集め大お兵を督し九尾白狐助大總督とゐり赤皮困太郎參謀たり更お又閻魔の廳下お至り援屁を請ひ以て猫兵を魔窟ヶ原よ遊へ既よ去て両軍戰ひを挑む尼武〳〵狐武〳〵碁擊突進縱横お入ゞ乱れ両軍の放屁三十斤のクルップ砲を一分の間もおく發射それば其聲嚇々天地を動ゐし山岳爲お分裂せんとするの景況お至き既お去て猫軍此緋褌隊は乱そて春花雨よ和し飛ぶゞの如く狐軍の赤尾隊は敗そて紅葉風よ乘じて颯へる如く紅裙隊い九尾隊と尻を接して又尻を出し紅粉隊は白尾隊と闘で雪又雪を吹き飛ばし或い進み或い退き一勝一敗輸贏未だ決せ ず時お一勇の猫あり利爪を揮ひ大喝一聲狐軍を罵つて曰く你狐賊等狡猾日一日より甚だ ま く其不屈至極ある怪獣社會蠻狐苦公法の規則を犯して密かお其尾を賣り豈啻だ我徒鑑札おふして働き三絃を待合茶屋の階上よ枕そ去て眠る者あるゞの如き此比あらんや猶々我ゞの範圍を侵畧し我ゞのお客を横奪ー恬然知らざる者此如し何ぞ洒蛙突此甚しき乎昨今游客頗る經濟家とあり你等ゞの尻を以て經濟向此游とあし遂お汝騙窄よ陥るも此幾千万人あるを知らぎ故を以て猫國日お衰へ糧食月よ乏しく殆んど將お絲纈の浴衣を典さし盡さんとそ其怨み良越も實あらぎ狗猿も及ぶ ぎ敢て復讐の師を發し你等生を欲せゞ速かお降旗を揭げ以て我軍門お降れ然らざをゞ我將よ三尺棒公の援を乞ふて悉とく你等ゞの巣窟を屠らんとそ你等尚よく辞あるか一白狐八方お尾を振り猫軍を一睨去て奇楽〳〵然と罵つて曰你奴羅你武智等誑んで余ゞの言を聞け你元絃歌を以て其職とな し其尻を賣るの職よあらざるあ

り然るに今の猫は腰抜猫とあり專ら轉れ一字に小判を攫まんと欲し彼の娼妓と何ぞ擇て、ん其最も狡猾なる者い猥りに鯨的の鼻毛を讀み恣まゝに神士の臀毛を抜き其月給を奪ひ其尊閨を逐ひ傲然人に向つて其權品に驕る其罪却つて我徒より深し名い猫ありと雖も其實い則ち鼠兒なり……轉に依つて之を論せば寧ろ我同穴の狐たりと謂ふも亦可なり是れ無名の軍を顧起し我國に寇せんと欲するの鐵面皮と謂いんか之を斜圓虞と謂いん歟汝等巧に紅粉を塗つて其黠面を掩ふと雖も汝か尻に就て之を問へ必ず一も潔白れ尻あからん。你速かに三舍を避け其罪を謝せ可きあり猫憤然牙を露いし曰く你白狐猶よく我を嘗と頡頏んと欲する歟你ぞの面目を却つて鉄甲舶より厚し你等三尺棒公の狙擊に遇て十狐一斃赤白伍をあし赤恥を白晝に晒らす者凡そ月に幾回ぞや你猶未だ懲ずに又其尾を賣り又顯はれ又賣り其底止する所を知らず你に因て獸社れ頽敗浮風いよ〳〵瀰蔓豈夫れ之を伐た猿を得べけんや豈夫れ之を懲らざるを得べけんや我軍棒政府に代いり之を討つ你等退いて其罪を顧ず幸ひに悔ゆる所あれよ狐啞然令笑して曰く你又寐言を吐く事勿れ何の面目あつて斯の大言を發するや爾等亦屢々縛に船宿に就き擒に遭ふに待合に就くと雖も恬々として悔る色なく轉んで而して又轉び七轉八倒遂に醜態を新聞紙に晒らさるゝ者幾に少あるら猿なり猶等我ぞの臭を知らず却つて他れ臭きを笑ふおと之を鐵皮面れ親玉と云はんのみ我豈爾か下風に立つへきものあらんや一罵一〳〵言更に其勇を皷し両軍又遇ひ爪牙相接ず偶ま〳〵老狸婆あり両軍れ間に入り和を結ばしめんと欲し先づ猫軍に到り而して說いて曰く夫れ狐軍いい最後の尻あり

て曰く猫兵あい鋭利の爪あり戰ひ破るれば必ず爬く其利以て狐皮を破るに足る寧ろ平和あ鹿猿あと両軍漸く之を容れ遂に狸寐入とあつて而して戰止む維時い明治二十年傳十月王れ一日なり……

天保先生之傳

先生性は銅氏名い錢字は孔方天保と號ず嘗て鑛山れ人あり本金氏に出づ分親して而して姓を銅と改む幼にして鼎罐盤器の業を好まず曾て幕府の儒者造幣先生に隨ふて而して學ぶ造幣先生其質を好み學げて省陌通寶とあと以て世に通せしむ人とあり容貌長圓顏色摠て黄美安居を好まず日々夜々諸處に同り其行歩れ輕捷飛ぶおと尙羽翼あるごの如し其走るおと未だ嘗て其足をみず貴賤貧富の人を論せず而して交り美惡清汚の處を避けず遊友連朋通せざる所あし或い鍬箭の中に潛み或い蒙戰の裡に出攻ず其入るや速かに去て其出るや又速かなり能く嚴毅の顏を解かず能く獲き難きの口を開かしむ能く飲食せしめ或い眼を歡ばしめ耳を樂ましむ此ゆえに人先生を見れば則ち喜ひ先生を見ざれば則ち憂ふ其人に慕いる〳〵又知るべきあり當時諸銅貨中あつて其名聲最も世に鳴る近來諸物價少く沸貴れ兆あるに當り諸銅貨一時大に昇進ずるも先生獨り學らず留に學らざるれ人ならず其位二級を貶せられ間も無く霹歷一聲先生れ頭上に落ち遂に非職とある嗚呼夫れ屈原ごの清潔の水に惑ふおとを嘲り介子ごの龍蛇の歌を吟ずるを笑ふ嘗て云ふ夫の上德は德あらず其光を和し其塵を同ふず是れ之を玄銅と云ふと……世人先生の非職を聞き落膽殆んど措く所を知らず我蠅寒生殊に一層の感覺を與へらる世人又然らんおとを

化六なる者名は棒鱈字は鈍馬哩々天皇嘘八百代奴痴面彌次郎兵衛の玄孫なり世々神田八町堀に住む人となり無我夢中常に片羅を以て拭涕紙となし敢て以て意とせず唯々婦人に至つては其飽を知らず時に「極好ない男だよ赤飯屋の看板も宜しくと云ふ樣な顏向で……喃嘆と爪彈きせらるゝ事其統計表を審査時一日中一、二三五の多に達せ豈又恐れ猿屁縣や是を以て常に皆はへの字をなし口は常に荷牛と五同樣涎を流せ其ミエを助兵衛に加ふる者なる又知るべきなり父阿烏吉嘗て其弟開八を去て九尺二間の身代を嗣ぐしめんと欲せ父死せるに及んで開八則ち化六に與ふ化六曰く君ぞ此家の財産を續ぐべきは亡父の命令なりと堅く辭せて遂に脫走せ開八も又嗣りを肯せざ而去て羽衣なきの仙人氣取りて山谷に逃る是に於て平其親類大工の八、左官の熊、飴屋の獅子等と計り裁判官れ指圖に據りて總領れ甚だ六を立つ……

於是化六開八の二人橋本町れ願人坊等猾懇れ指南をせると聞き乃ち其夥徒に投じ日日淺草両國、島原、秋葉れ原、佐竹の原、等に技演せ既にして化六開八に謂ふて曰く今や文明開化の聖代に當り田舍の蜻蛉も民權を唱へ東京の車夫も自由を稱せ我蠅と雖も三千七百余萬の一人なり而るに濺業を以て自ら處せ眞に人參具足なり宜しく業を轉ずるに鹿猿なりと開八は則ち大神樂の親爺となり化六と貸坐敷の妓夫となる……

一日化六娼妓の午睡せて大切の不動產を暴せを見て戲諸に七色番椒を盛る娼妓刺痛を覺へ驚醒し怒つて之をお樓主に訴ふ化六大に其罪を怖れ亡げて島原の淫賣家に隱る後ち又更に新橋の妓奴となる……一夜鯰的の爲に應來を媒妁し功を以て等外一等に拜命せ明治十年三月西鄕隆盛叛旗を鹿兒島に飜へせに至るや化六之を聞き驚き懼れ即日帽子を掛けて而して去り行々墨水の濱に吟ず顏色突出其風采恰も荒布の行列れ如し途に開八遇ふ開八曰く兄は百里當の一官吏にあらずや何故に此邊に躑躅するや……化六曰く西鄕翁事を鹿兒島に學ぐ必ず事變上國に及ぶべし僕卑賤と雖も一ッ官員なり……若し私學校生徒の爲に虜りにされ茶ァ即ち性命も危し……是を以て好んで猫と鯰を喰へり……兄未だ聞かず猿に本月三十八日を以て團々珍聞業を開くと蓋し往て賴まんやと我社に來つて探訪者あらん事を請ふ乃ち延見せるに堂屑屋に見倒させると雖も等外一等先生とは些と買過ぎん依つて其履歷を聞くに前事れ如し社長以て爲らく彼の經歷せる所のものい本社の穴を穿たんと欲せるも其のみ彼を以て探訪となさば必ず妙臭異變を嗅ぎ來るべしとて月給八百圓を以て探訪に任ず幾何もなく探訪長に進ず年俸金貨一万五千弗を給せらる凡そ本社珍聞の紙上鯰的の髯を拔き下い藝妓社會牛屋のお傳婆揚弓店の莫連等政府の稅金徵收に於ける如く水も洩さず皆化六の探訪に係る故に此れ如き奇密を得て其任に堪ふる鯰的社會の電信柱に於けると同時に去て談ず屁唐猿れ狸靴にあらずや

楷幣先生傳

講樽師の所謂豪傑なるものい赤手蛟龍を捕へ大喝一聲虎を叱吒せ徒らに其机を叩き鳴らし眼い瞋つて八百善の皿より大きく口を開けば則ち曰く木村又藏曰く宇治川の先陣曰く四天王俱馬守曰く孟賁と……豪傑い則ち豪傑なり然りと雖も我蠅以て之を觀ぶば皆向ふ見

その猪武者よして眞の豪傑と謂ふよ鰐猿あり

夫れ眞の豪傑と云ふものゝ坐あごら天下をして或い強く或い弱く人命をして或い活し或は殺し其生殺與奪權を握る　天皇陛下も宙あらざる位意よ隨としむるゐそ是れ眞の豪傑あり其人ありや方今只一人あるのミ曰く紙幣大先生是あり……

充生名い札字は片羅金貨は分家あり慶應四年を以て西京ゐ生る賦性沈靜寡言よして容姿頗る片羅〳〵然たる恰も妍婢ゑる婦人の如し偶然之れよ接そゞば小兒も又玩弄よ勝もべし常よ翡桐龍鳳の繡衣を着し身よ大日本帝國政府出納局長及び銀行局長との印鑑を帶び手車よ乘り天下よ往來そ大腎鹿族も之ゞよ遇ねば腰を折り禮を卑ふし以て待そ若し熊公のれ腎を拭ふと命せば謹んで命を奉そ藝妓も之を見れば二の膳を据ゑ布團ヶ温めて以て待〻娼妓之を嗅げゞヤイノ〳〵の文遣ひわら〳〵もしモ矢の如く尖出野郎印度人の見本も宜しくと云ふ樣飽痴男と同衾と命それば則ち喜んで之を奉そ指令の及ぶ所高山と雖も谷底とあり海の眞中と雖も待合茶屋とも揚弓店ともあらしむ九尺二間は金屋と變じ山神化て令閨とある宿六轉つて殿樣とある等外先生は奏任よ進む其威力既よ斯の如し人望よ於ける亦然り假令ば兵卒の軍よ在りて陣を陷入れ敵を叩き殺し手を失ひ足を落し德利然たる半人間とあるも屈せそ厭とず大將の雁首を獲んと欲そるものは先生を思ゐゞあり燒芋書生ゞ萬里の怒濤を破つて歐米よ行ら卒業免狀を得んと欲そるも又是ゞ先生を省そればあり我蠅新聞木葉記者ゞ鐵筆を擔ぎ出し條例違背あんかんと石川島へ投込まれ三度の麥飯も七分よ三分菜葉の香の物で盃〳〵として又時よ大法螺を吹て猫や狐と素鈴狐狼狸夢と巫山戲散らそも皆是ゞ先生の爲めあり……

其他永年を閲ふ貪吝爺より以て天麩羅を立ち喰ひそる丁稚小僧よ至るまで片時も先生を忘るゝ者あし由之て覩之ゞ今日の我國は先生よ憑つて以て國をあゞ人民は先生あつて以て生を安んず故よ一朝先生の震怒よ觸るゝあらゞ則ち人命い以て逐轉し邦國い以て斜よ造作付貸店の札を貼付よ至る社會の輿廳存亡を只一身よ擔當そる總理大臣も千舍を避け豈夫れ眞の豪傑と岩猿屁縣や……

先生一日運動かたゝ銀行よ至る偶まゝ舊友金貨と久振りよて對面そ互よ無病息才を問ふ……外い一言半句を吐露そるよ遑あらそ且互よ其威望を博せしを賀そ……先生曰く驕ある者は必そ衰ふ僕今や一億八千余萬の眷族を率ひ以て天下を蹂躙そと雖も其實漉反紙と一般よして只一時の便利上鼻涕を拭ふよ過ぎず顧ふよ五年を出てずそて必そ君の風下よ立ゑん淮陰侯の曰く狡兎死し走狗烹らると僕豈又神田川の傍か若そくい佐久間川の畔よ烹られ猿を得んや金貨慰めて曰く勢ひい將よ然るべくも僕も又此財政不整の世界よあるを愧づ故よ先生よ先ち西海を踏んで死せんと欲す……君幸ひよ念いるゝ勿れ先生之を義とし是より常よ歩を金貨よ讓る此れ金貨百圓を以て紙幣百八十圓よ換もる所以あり

鶯の説

昔し近衛帝の時怪物あり猿面よ去て蛇尾あり且虎身其啼く聲鶯よ似たり因て名づけて奴惠と云ふ世傳へ以て奇獸奇体とあゞそ然れども此は特ゐ怪化の等外先生よ去て敢て怪ひよ鰐猿あり今翳客海を見る目ゐ觸を津ゐ迷ひ取舍定りあし其頭髮は英佛富强の如く其鬚髯は鯰あ

んぞは糞を喰へ關羽那破烈翁の如く其腹外は豐大閤の如く其腹内は芥溜の如く……自ら以て思らく我おそ世界無二一子の相傳日の下開山前代未聞無類飛切大極上々の別品塞晒一本生き別製念入特別格別（否違つた）……併も勳章龍紋付ぎり〳〵穴着の大豪傑と稱し曰く此事厩山翁之を失ゑ聖東得たり曰く岳飛は是ならゑ秦檜從ぐのふべし其慷慨は則ち天保錢より賤むべし嫵媚は十圓の片羅よりも貴むべし分て而ゑて之を言へば理りあるゑ似たり綜ゑて而して觀之べ少も條理あく恰も陽物を把つて首とおし首を將つて股間ゑ挾むぐの如く頗る茫乎と―て天を欺き人を誤り徒らゑ食殿の建立の爲ゑ此刀筆を振舞し此お口饒を皷ゑ故を以て終身悲歌感慨の徒ゑ叱られ果して其事の表裏反覆飽陳漢あるを知らず之れ是を命じて亦奴恵と云ふも敢て不可おのるべし果してあくんば此を勅任の怪物あり今源三位頼政を して之を射せしめば果して何等の給月（チット筆ぐの辷ッタ）弓術を以てゑるか嗚呼……

不良軒出連助先生之傳

丹痴夢ゑして天下の騷動を起し縉紳ゑして而して無茶苦茶ある乱暴をおゑ社會おをなきばおし之を要ゑるゑ不屁噴嚏々々を乱痴機の間ゑ洩らさんと欲して然り是を以て陳陟は漢の高祖の提燈持とあつて而して終り石田三成は德川家康の懷鼻褌擔ぎと爲つて而して死ゑ然りと雖も其懷鼻褌擔ぎ提燈持と爲る初めの心之を願ふゑ非らゑ皆南面して孤と唱へ天子將軍とおらんと圖太く仕掛ると雖も如何せん當初之をゑ敬ふる向ふ見ゑを以てゑる者あるゑ由つて事頗る飽痴夢姦ゑ渉り終ゑ帽子の臺を紛失ゑるを致ゑ豈笑止おらざらんや或人曰

[illegible]

号あり世々謀反人の腹中ゑ衣食し資性剛腹ゑして野暮乱暴を以て自ら任じ竊ゑゑ邪氣を貯へ天下不平の徒を待つ其氣象たる常ゑ冥々ゑ中ゑ寓し而して政府失体の間ゑ發ゑ秦の始皇之れゑ遇ふて阿房の肩書を遺し平清盛之をゑ觸れて舉族以て壇浦ゑ溺る宋の高宗之ゑ感て慴弱亡國の基を開き德川之れゑ魅入られ以て祖宗の株を失ふ古來英雄豪傑ぐの先生の氣ゑ出つ食して縮尻を爲ゑ斯の如し且夫き先生の身体天下ゑあるもの娼妓ゑ都鄙ゑあつて往く所として而して非らざるおきぐの如く故ゑ佐賀ゑあつては江藤新平を指揮し肥後ゑあつては神風黨を使役し山口ゑあつては前原一誠を號令し思案橋ゑあつては長岡久茂を引廻し芋ゑあつては西鄕隆盛を弄し官途ゑあつては陸奥宗光を煽動竹橋ゑあつては近衛兵を尻押し其他何は近きは福島ゑあつて河野廣中を茨城ゑあつては富松正安を大坂ゑあつては大井憲太郎を凡そ先生の滅法界ゑ於ける勤たりと謂ふべし然りと雖も其身を盆筵ゑ上ゑ擲出し一六勝負則ち袁彥道ゑ總理大臣とあるは顧ふゑ我國昨今ゑ景決猫い櫓ゑ進ゑ狐い正室ゑ變じ總的い我威を以て天下を一呑ゑし八公は天權を以て之を制せんと欲し互ひゑ折ゑ合わ猿ゑよりし其隙を窺ふの故乎然らば則ち不良軒先生の資性果ゑて剛愎乱暴か否やい後日輿論を待たぞんば飛田無暗不良軒あんゑかんゑと斷言ゑ屁唐猿あり……況んや氣ゑ正たり邪あるをや我蠅茲ゑ之れぐの傳を作り敢て同業同臭の滅法者流あらぬ色男先生ゑ質ゑと書うち傍から覗きゑむ一人の書生先生ゑんまり長ゐと看客ぐのおあきゑあるゑ主人其んあら是ノ打

出タ　親釜集……

叢々亭　突飛道人　出放題畢

六三

明治二十一年六月十四日印刷
同　年六月十五日出版

（板權所有）

版權登錄

著作兼發行者　東京日本橋區箱崎町二丁目一番地　鴻里正吉

印刷者　同京橋區南鍋町壹丁目八番地寄留　早川龍三

發兌元　目覺屋

091799−000−4

特67−733

出放題

叢々亭　突飛道人／編

M21

DBO−0314